



低線量の放射線の照射
で免疫力を増強し
ガンや難病を改善する
「ホルミシス療法」とは？

「ホルミシス療法」という言葉をご存じでしょうか？ホルミシス療法は「少量の毒は薬になる」という事実を根拠として始まった治療法です。現在は、主に低線量の放射線によって免疫力を増強することでガンや難治性の疾患を改善する治療法として医療の現場で応用されています。

ホルミシス効果とは、もともと菌類の成長を抑制する物質が低濃度では逆に菌類を刺激して成長を促進するという事実から発見された「アルント・シュルツの法則」を元にした言葉です。

低放射線ホルミシス療法で ガンや難病が改善する？

その後、「ホルミシス」という言葉は使用範囲を広げ、「薬剤や放射線による少量の害が逆に生体の免疫力を増強することで病態の改善・治癒などの有益性を持つ」という意味で使われ、今日に至っています。

一般的に放射線は少量でも害があることが知られ、医療用検査のレントゲンやCT（コンピュータ断層撮影検査などでも怖がる人がいます。福島原発事故や原爆の影響からか、日本では「放射線」というと非常に害の大きな怖いものという印象があるのかもしれませんが。

ところで、放射線を浴びたら、体はどうなるのでしょうか。放射線を浴びると電離作用、つまりイオン化が起こります。人間の体は約七〇％が水なので、当然放射線は水に当たります。すると、水分子のH₂OはHとOH

に分断され、活性酸素フリーラジカルが発生します。つまり、放射線の害は活性酸素の害なのです。

皆さんが怖がる放射線は、実は自然界にも普通に存在します。例えば、まず宇宙からやってくる放射線。次に岩盤から地表に放出される放射線や、空気中の放射性物質によってもたらされる放射線。また、食品中に含まれる放射性物質によってもたらされる放射性物質も自然界には存在します。つまり、普通に生活していても、人は常に放射線に被ばくしているのです。その被ばく量は世界平均で年間約二・四ミリシーベルト、日本では約一・五ミリシーベルト程度といわれています。

ここで、放射線の単位についてまとめておきましょう。ベクレルは放射性物質が放射線を出

る量、シーベルトは放射線が人体に与える影響の単位です。放射線治療はガンに対してたいへん効果的な併用治療法といえます。しかし残念ながら、低線量放射線治療は一部の悪性リンパ腫を除いて行われていません。

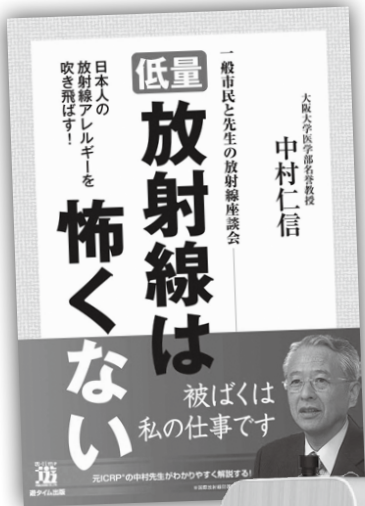
イギリスで集められた放射線科医の症例データも報告されています。X線が発見された当時は放射線機器も未発達で放射線防護の知識も乏しかったため、放射線科医は大量の放射線に被ばくしていました。そのため、一九二〇年以前の調査では、放射線科医三三九名は年間約一〇〇ミリシーベルト以上の放射能を被ばくし、その結果、ほかの一般の医師に比べて一・七五倍もガンで死亡する数が多かったと報告されています。

その後、放射線の有害性が明らかとなり、放射線防護機器や放射線照射機器が改善されて放射線科医の被ばくは急激に減りました。一九五五年以降には年間約五ミリシーベルトまで減っており、その結果、放射線科医一

三五二人のガン死亡率はほかの一般の医師に比べて二九％も減りました。

また、ガンだけではなく、それ以外の死亡率も三六％も低下しました。つまり、低線量の放射線を浴びた放射線科医は、ほかの一般の医師よりも平均的に長生きしたことが判明したので

す。このように、低放射線は有害どころか、ガン治療や健康増進、長生きなどに効果があることが判明してきたのです。そこで、日本先進医療臨床研究会の会員など一部の医師らは、年間五〇〇ミリシーベルトまでは安全性が高く治療改善の可能性があるとして低放射線ホルミシス療法に取り組んでいます。例えば、一〇〇万ベクレル以上（年間一九ミリシーベルト以上）の低放射線を発生するラドンガス発生器による吸入治療や、毎日の入浴時・歩行時にラドンによる低放射線を照射する低放射線ホルミシス機器などを使って、標準治療だけでは完治が難しいガンや難病の治療を行う症例研究などがあります。



『低量放射線は怖くない』
中村仁信著
(遊タイム出版)



低放射線
ホルミシス吸入器
「ヘルシーラドン」